

降誕節第7主日 説教 「主の御許に身を寄せて」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年2月7日

イザヤ書 57:1~13

牧師 黒田直人

1918年、大正7年2月7日、日本キリスト教団藤沢教会はこの地にて福音宣教を開始しました。そして、礼拝の場を二度移転し、今日に至っているわけですが、ただ、教会設立時にどこで礼拝したかは定かではありません。しかし、メソジスト教教会の監督であった鶴飼猛牧師が度々平野家を訪れ、聖書講義に当たったと百年史にあることから、恐らくは、平野家、もしくは、その関係のある場所でその産声を上げたであろうと想像します。そして、記録によれば、創立したその年には、男子一名、女子三名が受洗し、また、平野友輔の妻、藤が藤沢教会に転入会し、さらには、日曜学校出席者は四、五十名とのことありますので、教会設立はその氣運がいよいよ高まったがゆえのことでもありました。そして、その勢い収まらず、翌年には、受洗者九名、入会者八名、日曜学校生徒57名とのことです。教会創立時の状況は、真に祝された順調な滑り出しであったということです。それゆえ、そうした流れの中で教会の次なる行動は会堂建設です。大正十年、1920年、ドレーパー宣教師の尽力より海外ミッションの援助を受け、旧東海道の北側にある陣屋小路に土地を取得すると、その翌年の大正11年には献堂式が執り行われ、そして、その12年後の昭和8年には、現在の土地を新たに取得し、ちなみに、その売主は鳩サブレの豊島屋であったとのことありますが、この新たに取得した土地に教会を移転し、会堂牧師館の建築、さらにはみくに幼稚園開設と、ミッションの助けを借りながらのこととはいえ、この大事業を見事に成し遂げたのが私たちの先達でありました。

そこで、創立よりの15年間を簡単に振り返りますと、まず、最初に礼拝を行った場所が平野家とするなら、それは、藤沢市民病院と今の中央公民館のちょうど中間地点ということになります。つまり、「日本メソジスト教会藤沢講義所」が立てられたのはその付近であり、ここに日本メソジスト教会小田原教会牧師であった渡辺常三郎を初代牧師として招き、その転任定住をもって藤沢教会がこの地に誕生したということです。そし

て、そこで改めて覚えたいことは、メソジストの宣教師であったドレーパーの働きと、この地での伝道を支えた平野友輔の働きです。恐らくは、この二人の出会いと教会設立を期する篤い信仰がなければ、私たち藤沢教会がこの地に建てられることはなかったでしょう。ですから、このお二人の名前だけはしっかりと覚えたいと思うのですが、それは、このお二人をもって代表される信仰が、私たちが今日なお受け継いでいるものでもあるからです。

では、私たちが今日まで脈々と受け継ぎ、そして、後々に生きる人々に伝えるべき信仰とはいかなるものなのでしょう。まずその一つは、熱心さと敬虔さ、つまり、pietyです。平野友輔の娘で、神奈川県保育養成の先駆けとなった横浜女子短期大学の創立者でもある平野恒という方がおりますが、その平野恒が常々語っていたことが「「幼子のごとく」ということでした。つまり、この平野恒の言葉に表されているように、私たちが受け継いだ信仰ゆえの熱心さ、敬虔さとはつまり、幼子のごとく素直に神様の御声に聞き、実践するところに現されるものだということです。ですから、そこには邪気がない、それゆえ、その信仰は、素直さと純粹さを兼ね備えた汚れなきものと呼ぶことができます。そして、それが、ある意味で、日本人の多くが抱く基督教のイメージでもあるのですが、しかし、主の教会は移り変わる私たちのその時々気分によって形作られるものではありません。信仰に生きる人々がいて、その人々によって形作られ、受け継がれるものが、この汚れなきものの所以であり、そういう意味で根の浅いものではないのです。ですから、私たちがこの創立記念日に、その点を踏まえ、私たちの教会とその信仰の始まりを覚えることはとても大切なことでもあるのです。その志の高さと当時の人々の純粹さ、これなくして、私たちが私たちがあり続けることはあり得ないことでもあるからです。

そこで、話を元に戻しますと、私たちが受け継ぎ、そして、後世に伝えるべき信仰とはいかなるものであるのか、一つ

は今申しましたように熱心さと敬虔さ、つまり、それが平野恒が語った「幼子のごとく」ということではありますが、このことに加えてもう一つ、私たちが受け継いできたもの、それは、これはいつも皆さんに申し上げていることではありませんが、私たちの信仰は、私たち自身が自分自身が何かをするしないといったことを土台とはしていないということです。つまり、そうした自分自身への拘りが私たちが受け継いできた信仰ではないということです。私たちの信仰の土台も、そして、教会の土台も、それは、私たちの主イエス・キリストです。この方が私たちの中に共にいまし、私たちを支え、導いてくださっている、ですから、このことについては、皆さんはすでにお分かりのこととは思いますが、ただ、分かりきったことを繰り返し語られることはあまりいい気分ではありません。そのため、辟易としているという方も恐らくはおられるでしょう。けれども、この主イエスが共にいますということ私たちが分かる、分かっていると断言できるのはどうしてなのでしょう。

それは、先ほどの平野恒の言葉にあるように、私たちが主の御前にあつて「幼子のごとく」あるからです。つまり、主イエスのことが見えている、見えているから、この方の喜ぶことをしたいと素直に正直にそう思う、だから、邪気がなく、汚れがないと言えるのです。そして、それが私たちが脈々と受け継いできた信仰で、ですから、明治、大正、昭和と、メソジスト教会がその宣教活動において大切にしたのは、この幼子のごとき素直で素朴な信仰でした。私たちメソジスト教会の伝統に立つ教会は、それを敬虔さ、pietyと呼び、大事にしてきたのですが、それゆえ、日本メソジスト教会は、教育、福祉、医療の分野で我が国において大きな貢献をなすこととなりました。今、ここに「ある」人々、共に生きる人々のことを幼子のごとく大切に思ったからです。そして、それは、私たち藤沢教会もそうです。教会と附属みくに幼稚園の働きを通して、地域への奉仕を続けてきたのが私たち藤沢教会でありました。そして、私たちがそのように神様に喜ばれる働きをなすことが許されたのは、神様の導きに加えて、私たち藤沢教会が立てられたこの地が、まさにそういうものが育まれ、養われるにふさわしい土地柄であったからです。

広重の浮世絵にも描かれておりますように、藤沢は遊行寺の門前に立つ宿場町です。そして、この遊行寺の目と鼻の先に、ご維新からちょうど50年後に立てられたのが私たち藤沢教会でありました。50年前というと、私たちにとってはちょうど万博が開催された年でもあります。その変化はいかばかりのものか。ご維新から50年がたち、当時は大正デモクラシーと呼ばれた時代です。そして、平野友輔に至っては、神奈川県では学校の副読本として取り上げられている自由民権運動の闘士であり、衆議院議員として活躍した人物です。そして、藤沢では、藤沢小学校、鶴沼小学校、明治小学校と、藤沢の様々な小学校の校医として地域に奉仕貢献するお医者様でもありました。つまり、平野友輔は、地元の名士、有力者ということでもあります。が、教会創立時の順調な滑り出しはそれゆえのことでもあったのでしょうか。そして、この平野友輔の次女恒の幼い頃のエピソードが百年史に記されているのですが、恒は次のように述べています。「幼児期に遊行寺で遊んでいる折、幾度かキリスト教のゆえに仲間からいじめられた」と。つまり、大人たちの事情が子どもに及んでいたということですが、そこにはやはり、遊行寺の門前町ならではの影響があったのでしょうか。ただ、百年史に目を通し驚いたことは平野恒の次の言葉です。「兄が11歳で他界した折は、初めてのキリスト教式葬式を出し、葬式こそ珍しがられたが、翌日には親戚一同の要望で、墓を掘り起こさせられ、他所に移転せねばならなかった。遊行寺のお膝元で、キリスト教とはなんぞけしからんという雰囲気であった」と恒はこう語っているのです。

一端墓に収めた亡骸を再び掘り起こすことは、死者を辱めるだけでなく、悲しみに暮れるその遺族をも貶める暴挙です。ですから、絶対に許されないことです。けれども、それが良識ある人々の中で起こり、そして、平野家という有力者家族であってもこのことに抗うことができなかつたということです。つまり、この地域に立てられた、曲げることのできない一つの理屈に平野友輔も平野家も屈せざるを得なかつたということです。ですから、この親族からの理不尽な要求を飲み込まざるを得なかつたところに、藤沢の地に教会が立つことの厳しさが現されているのは間違いありません。そして、それについては、ドレーパー宣教師

も度々ミッションに報告しているところでもありますが、先ほど、順調な滑り出しであったと申しあげましたが、当時の教会関係者の認識では、ですから、遊行寺のお膝元である藤沢は、その当初から伝道困難な地であると、このように理解されていたということです。しかし、この地に立てられている、曲げることのできない理屈に平野が屈したということは、それがそのまま教会の信仰が負けたたということではありません。なぜなら、そのことに続けて、平野恒が次のように語っているからです。

恒は語ります。「重要なのは藤沢の地が排他的であったことは、かえって信徒を強め、キリスト教会の基礎を築くには適している土地柄であったことだ」と語った上で、「脈々とした流れが、現在の藤沢教会を支えているのだ」と、恒は確信をもってこのように語っているのです。つまり、平野恒が教会の始まりを思い起こし、そように今日にその当時の出来事、その時の思いを残してくれているのは、ここに、私たちが受け継ぐべき信仰の姿があるということです。そして、このことはまた、この日の御言葉が私たちに語りかけるものでもあります。御言葉はこう語ります。「しかし、平和が訪れる。真実に歩む人は横たわって憩う」と。そして、こう語られているところに、また信仰を受け継ぎ、今日を生きる私たちの姿があるのですが、それは、そこで語られている恵みに与るのは、この言葉を口にした者ではなく、この言葉を口にした人々と同じ信仰に生きる、信仰を受け継ぎ、その将来に生きる人々であるからです。従って、御言葉が語るように、この平和を平野友輔始め、先達の方々は直接味わい知ることなく、主の御許へと召されたということです。つまり、苦難と忍耐の日々の中、「幼子のごとく」篤い信仰をもって与えられた生涯を全うしたのが私たちの先達であったということです。そして、その信仰を私たちは受け継ぎ、私たちは今日を迎えているわけですが、ですから、「新型コロナウイルス」による感染症の蔓延する中、大きな混乱もなく、私たちが主のご用に与ることができるのは、受け継がれた信仰の賜物ゆえのことでもあるのです。そして、それはまさに、主我らと共にいます、主が私たちのこの群れの中に確かにいてくださっているからであり、従って、そのことを誰よりも喜んで

は、イエス様であり、イエス様と共にある先達の方々でもあるのです。

それゆえ、御言葉がまだ訪れぬ平和を語りつつも、御言葉が語るこの平和は、主が共にいますがゆえに、未だ訪れぬその時にも、主を信じる群れには実現していることなのです。平野恒の藤沢が教会の基礎を築くにふさわしい土地柄であると言っているのはそれゆえのことであり、決して強がったことではありません。まさに、それが自ら体験したことであり、信仰の第2世代として、親から受け継いだその信仰に生き、次の世代へと伝えようとしたのが平野恒であり、この恒が「藤沢が教会の基礎を築くに相応しい」と言っているのは、まさに「幼子のごとく」神様と共に生きたがゆえのことであったのです。それゆえ、この始まりを受け継ぐ信仰を通し、私たちが今自身自身の置かれている現状を見るなら、平野恒なら何と言うのでしょうか。それは、私たちが「コロナ禍」呼んでいる現状の呼び方については、ちょっと違うんじゃないかということです。なぜなら、禍いをも用いて神様は私たちをより良きところへと導いてくださる方であるからです。そして、それは、私たちの集うこの場所に神様が共にいてくださっているからであり、しかも、私たちにはそれが間違いなく許されているわけで、このことはつまり、私たちの神様もイエス様も、人の心の中にいるのかいないのか分からないような曖昧な方ではないということです。私たちの中に、確かに共にいてくださる方であり、それが私たち藤沢教会という主の群れであるということです。まただから、私たちがその一人一人であればこそ、私たちは必ずこの幸いを味わい知ることになるのです。

平野恒が今日に伝えてくれていることはこのことであり、そして、それを知っているのが教会設立からちょうど103年目の今日、こうして礼拝を共にする私たちであるのです。ですから、それを思いますが、私自身のことをとても恥ずかしく思います。それは、今の現状を言い表す上で「コロナ禍」という言葉をこれまで度々用いてきたからです。それゆえ、自らの不明さと不信仰に恥じ入るばかりであります。しかし、この交わりの中にしっかり置かれ、恥ずかしいことを恥ずかしいと、そう受け止めることができるからこそ、身につけるものが何もないことが決して恥ずかしいことではないと、つまりは、創世記の2章で罪に陥

る前の人間がそうであったように、神様の御前で丸裸であることは決して恥ずかしいことではないと知らされるのです。まただから、私たちは、幼子のごとく、神様が示される道を、求められる方向へと向かうことができるのです。

そして、その私たちが向かうべき方向、進むべき道がありますが、それは、主の導きによるその始まりの中にすでに現されていることでもありました。そして、それを具体的に私たちに指し示すのが私たちを天の御国で待つ人々です。従って、今日の御言葉の最後に記されている「私に身を寄せるものがこの地を嗣業とし、わたしの聖なる山を継ぐであろう」と語られていることは、そのような私たちの生きる現状と、信仰によって導かれるその将来を現すものです。つまりは、ここに立ち、それを信じているのが、主我らと共にいます信仰に生きる私たちであるということです。しかし、それは、見方を変えれば、どういうことになるのでしょうか。それについて御言葉ははっきりと私たちに伝えます。それは、今申し上げた最後の箇所記されていることを除く、それ以外のすべての状況に立たされているのが私たちであるということです。つまり、神が沈黙する世界、神への関心を失った世界、時にここに立たされることがあるのが信仰に生きる私たちだということです。そして、その理由は、神を信じるに値しない、役に立たない、とそのように見なしているからでもあります。それゆえ、人は、自らを利用する偶像に心を奪われ、これに従い、利用できるものは何でも利用しようとするのです。しかも、そのことに恥らいつら感じない、そのため、不法ははびこり、悪徳は栄え、信仰は物の数にも数えられなくなってしまふのです。この日の御言葉が語るころは、主我らと共にいます信仰とは、そのような状況の中に置かれているものであり、そして、そのような中で我々が止まり、受け継ぐものとして語られているのが私たちの信仰なのです。

しかし、この信仰に生き、今日に至るまでこの信仰を伝えたのが私たちの先達でありました。ただ、神への関心を失った人々に向かって神様の御心を説き、それに従わせようとすることは、先ほど、見方を変えればと申しましたように、その人々にとっては伝える私たちこそがおぞましい、得体の知れない者とその目には映ったことでしょう。従って、先達の

受けた理不尽な仕打ちはそれゆえのことでもありますが、けれども、私たちの先達はその理不尽さに耐え、信仰を今日へと伝えてくれたのです。そして、それが開拓者としての彼らの役割であり、まただから、木を切り、土地を耕し、土地から多くの収穫を得るまでにこの土地を、先達は神と共に育ててきたのです。では、その後生きる私たちが次なる世代に信仰を伝えるためには、今何をしなければならぬのか、それについては、祈りつつ、答えを探し求めていかねばなりません。ただし、そこで答えを急ぎすぎてはならないと思います。それは、神がなさることを私たちが神に成り代わって決めることは許されないからです。

経済性や合理性など、世が大事にしていることを知ることは大事なことはありませんが、数を誇ろうとしたダビデが神の怒りに触れたように、数を誇ることが私たちに求められていることではありません。平野友輔、恒始め、先達の方々自らを誇るようにその発展、進歩を望まなかったように、私たちに求められていることは、神共にいますところに私たちが止まり、そこに共にある人々と教会という交わりを造り上げることです。そして、それは、狭い身内意識に縛られることでもなく、また、周囲から阻害されたがゆえのその傷を互いになめ合うことでもありません。平野恒が、この地がキリスト教の基礎を築くに適していると言っていたように、私たちが御心に聞き、寄り添うなら、その答えは神自らが私たちに備えてくださるに違いないのです。ですから、そういう意味で、私たちに与えられた役割とは、先達がそうであるように、この地にある人々と深く関わり、信仰をもって、日々新たな交わりを築いていくことです。そして、このことはつまり、キリスト教の気の時も知らない人々をこの交わりの中に招き、忍耐をもって交わりを築いていくことでもありますが、それが、いつの時代においても私たちに求められているものであるということです。つまりは、先達と同じように、キリストに我が身を献げること、それを求められているのがこうして信仰に生きる私たちであるということです。互いに愛し合いながら、祈りつつ、キリストに仕える私たちでありたいと思います。

祈りましょう。